

Whyの類型論

著者名(日)	遠藤 喜雄
雑誌名	言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要
巻	20
ページ	1-21
発行年	2014-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00001066/

Whyの類型論*

遠藤 喜雄

要旨

本稿では、英語のwhyに代表される理由を問う表現をいくつか取り上げ、それらの基底の統語的位置を特定することを目指す。具体的には、否定の島(negative islands)の制約を受けないwhyがCP領域に基底生成されるとするRizzi(1990)の考えに異を唱えたShlosnky and Soare(2011)の考えには、洗練が必要であることをwhat…for表現を見ながら示す。結論としては、理由を問う表現の基底生成の位置には、否定よりも低いタイプと高いタイプの2種類があり、その移動先の位置も2つあることを示す。さらに、how comeとwhy the hellを比較しながら、それらがwhyやwhat…forとは異なる基底の位置に生成されることを見る。

キーワード：why、カートグラフィー、談話、ムード

0. 序

本稿では、英語のwhyを足がかりに、理由を問う表現を言語類型論の観点から考察する。ここでの類型論は、最近のカートグラフィー研究に見る階層的な統語構造をもとにした新しい類型論である。

本稿は、次のように構成されている。まず、第1節で、whyの生成されるメカニズムをCriterial Freezingという原則をもとに考察する。そこでは、主として、否定の島の観点からwhyの性質を議論する。次に、第2節においては、英語の理由を問うもうひとつの表現であるwhat…forを取り上げ、それが否定の島に関してwhyとは異なる振る舞いをする点を見る。さらに、第3節では、このwhat…forに関連する他の性質を英語以外の言語を観察しながら、その特質を考察する。これらの議論を踏まえて、第4節では、理由表現の基底生成の位置で付与される意味と移動先で付与される意味を考察する。第5節では、howとwhy the hellに目を転じ、理由表現が基底生成される統語位置が4つあるこ

とを示す。最後に、第6節で全体の議論をまとめ、理由を問うさらに別の表現を考察しながら、今後の展望を述べる。

1. 背景

1.1. Criterial Freezing

まず、本稿の主たる関心事であるwhyに関わる原則を見よう。Whyを含めて、Wh表現は、通例、基底の位置からCPの領域へ移動した場合、A'連鎖 (A'-chain) を形成する。このA'連鎖においては、その末尾の位置で意味役割が付与され、その先頭の位置で談話やスコープの意味が付与される。つまり、A'-連鎖には、意味役割と談話／スコープの2種類の意味情報が付与される。このA'-連鎖には、次の制約が課される。

- (1) 凍結原理 (Criterial Freezing) : An XP meeting a criterion is frozen in place.
(Rizzi (2006)、Rizzi (2013))

この凍結原理は、談話／スコープの情報を持つ主要部が、その指定部の位置にそれと合致する談話／スコープ要素を持つ (meeting criterion) 場合、そのA'要素は、いわば凍結し、さらなる移動が禁じられる、という趣旨の原則である。この凍結原理がどのように働くかを、次の具体例を見ながら考察しよう。

- (2) a. Bill wonders [which book Q [she read ___]]
b. *Which book Q does Bill wonder [___ Q [she read___]]
(Lasnik & Saito (1992))

(2a)の文においては、主文の動詞wonderが、疑問(Q)の補部を選択している。その結果、主要部Qは、その指定部のA'位置にQの情報を持つ要素が生じることを求める。上の場合、Qという要素は、それに後続する文から合致するQの素性を持つwhich bookを指定部に引き上げる。ここで重要なのは、which bookが、この位置で主要部Qの指定部にQの意味素性を持つことを求める要請を満たすという点である。その結果、ここで、凍結原理が働き、which bookは、

Qの指定部で凍結され、(2b) に見るように、which bookがさらに主文に移動すると、凍結原理の違反により、非文法性が生じる。

1.2. 先行研究: Rizzi (1990, 2001)

この凍結の原則を念頭において、本稿の主たる関心事であるwhyを見よう。(3b) に見るように、通例は、疑問表現が文頭に移動してA'-連鎖を形成すると、そこに否定要素が介在すると非文法性が生じる。これは、否定の島(negative island) と呼ばれる。より正確には、(3c) に見るように、否定の島は、…X…Z…Y…という構造において、XとYからなる連鎖にXと同じ量化(quantificational) タイプである否定要素が介在することを禁ずる局所性の原理(locality principle) の一事例である (cf. Rizzi 2004)。さて、(3a) に見るように、問題のwhyは、この否定の島に従わない。(詳しくは、Endo (2006, 2007, 2012a, b) および遠藤 (2014) を参照のこと。)

- (3) a. Why didn't John fix her bike?
 b. *How didn't John fix her bike?
 c. how…否定要素…howの痕跡
 X Z Y

Rizzi (1990) は、この事実をもとに、whyは移動を伴うことなく、基底でCPの領域に生成されるとした。つまり、…X…Z…Y…という構造において、whyは、Yの位置を占めることなく、最初からXの位置に生成される。そのため、それに後続するZの位置に否定要素が生じて、XのみからなるwhyのA'連鎖はその否定要素より上位にあり、そのwhyの連鎖の中に、否定要素が介在することはない。その結果、whyには、否定の島の効果が生じない。これが、Rizzi (1990) の考えである。最も最近では、Rizzi (2001, 2004) は、カートグラフィの観点からCP領域が(4) に見るような、トピック、フォーカスをも含む詳細な階層をなすとして、理由表現whyは、この中で、Intという位置を占めることを、CP領域に様々な要素が同時に生じる事例をもとに解明した。

(4) CP-zone: Force Top* Int Top* Focus Mod* Top* Fin I


ここで問題は、次の文でwhyに複文が後続する場合に、多義性が生じるという事実である。

(5) Why did you say that John left?

この文は、whyがsayの主文の理由を問う解釈と、leftの理由を問う解釈の2つを持つ。Rizzi (1990) は、whyが補文のleftと結びつく解釈は、whyが補文の先頭の位置に基底生成され、そこで補文と結びつく解釈を持ち、その位置からwhyが主文の先頭の位置に移動するとした。しかし、ここで問題が生じる。Whyが基底生成される補文の先頭の位置は、スコープが決定されるCP領域の位置なので、Rizzi (2001, 2004) の立場を取れば、whyはその位置で凍結され、凍結原理により、更なる移動は阻止されるはずである。

1.3. ReasonP

この問題を解決するために、Shlonsky and Soare (2011) は、次の提案をした。Whyは、基底でスコープの付与されるCP領域に基底生成されるのではなく、否定よりも高いReasonPというIP領域に基底生成される。そうすることにより、下の図に見るように、whyは、否定よりも高い位置にあるため、そこから移動が生じた場合、whyの形成するA'-連鎖には、否定要素が介在することはない。その結果、(5) に見る複文構造で、Whyが否定の島には抵触することはない、補文の位置から主文の先頭のIntPの位置に移動が可能となる。

(7) Int...[ReasonP (=why) ...Neg...how...


2. もうひとつの理由を問う表現

本節では、whyとは別の理由を問う表現であるwhat...forを取り上げ、それが、否定の島に従うことを見ながら、Shlonsky and SoareのいうReasonPには、実

は2種類あることを見る。

2. what…for

まず、(8a)に見る理由を問うwhat…for…の表現を見よう。Peter Svenonius (個人談話) が指摘するように、この理由を問う表現であるwhat…forは、(8b)に見るように、否定の島に従う。

- (8) a. What are you coming to the US for?
 b. * What aren't you coming to the US for?

この事実は、forを伴うwhatが基底で否定表現よりも低い位置にあり、そこから文頭のCP領域へ移動していることを示している。このA'-連鎖には、否定の要素が介在するので、否定の島の効果が生じるのである。Forを伴う理由表現whatが否定表現よりも統語的に低い位置に基底生成されることは、次の(9)に見る独立した事実からも支持される。Byron Ahn (個人談話) によれば、(9a)において、forを伴う理由表現for foodは、常に否定の作用域の中で解釈される部分否定の解釈しか持たない。つまり、for foodは、否定よりも低い統語的な位置にある。一方、同じ理由を表わすbecause ofは、(9b)に見るように、否定の作用域に収まる解釈が可能である。つまり、部分否定と全体否定の両方の解釈が可能である。これは、because (of) が否定よりも高いReasonPと低いReasonPの2つの基底生成される場所があることを示している。

- (9) a. John didn't do it for food. (not >for food、*for food >not)
 b. John didn't do it because of food. (not >for food、*for food >not)

以上をまとめると、理由を問う表現には、(10)に見るように、2つの統語的な位置がある。1つは、否定よりも高いReasonPで、もう1つは、否定よりも低い別のReasonPである。この階層において、英語のwhyは否定よりも高いReasonPに基底生成され、what…forは、否定よりも低いReasonPに基底生成される。

(10) ReasonP (1) (*why*) > Neg > ReasonP (2) (*what for*)
 (high) (low)

一見したところ、what…for表現において、それが基底生成される位置は、必ずしもReasonPである必要はないと感じられるかもしれない。というのも、what…for表現においては、whatが理由の意味を表すのは、forという前置詞によると考えられるからである。しかし、次節で述べるように、このwhat…forに対応する表現を言語類型論的に見ると、このwhatに対応する表現は、forを伴うことがない。それにもかかわらず、そのwhatに対応する表現は、理由に解釈される。そこから、そのようなforが生じない言語では、ReasonPにおいて理由の意味が付与されると考えられる。つまり、やはりReasonPは2つ必要となる。

この点を詳細に見る前に、まず、このwhat…for表現の特質を整理しておこう。Ur Shlonsky (個人談話) が指摘するように、英語のwhat…for表現は、前置詞の残留 (preposition stranding) を伴わないと非文法性が生じる ((12a) と (12b) の対比を参照)。¹ Endo (2014) は、これを、次のように説明した。What…forのwhatが移動する文頭のCP領域の位置 (具体的には、IntP) は、英語では、その「サイズ」に制限がある。つまり、IntPの指定部の位置は、DPが入る大きさを持つが、PPを持てるほどの大きさはない。What…forのwhatの移動先は、forを伴うPPが入れるほどの大きさはないので、whatやfor what purposeのみが移動し、その結果、forが残留することとなるのである。そして、whyの移動先である別のIntPの指定部には、このような大きさの制限がないので、(11) に見るように、PPが移動してもDPが移動しても文法的となる。(ちなみに、このIntの大きさは言語により異なるようである。例えば、ロシア語では、for whatに対応する表現が文頭の位置に移動することが可能である。)²

- (11) a. What purpose are you coming to the US for?
 b. For what purpose are you coming to the US?

- (12) a. What are you coming to the US for?
 b. *For what are you coming to the US?³

3. What…forの類型論：

3.1. Surprise-Disapproval Question (SDQ)

本節では、前節で触れた、what…for…?に対応する他言語の表現を言語類型論的な観点から考察し、その特質を探る。Obenauer (2006) が観察するように、英語のwhat…forに対応する表現は、他言語においては、forに対応する前置詞を伴うことはなく、むしろ対格 (Accusative Case) を持つwhatに相当する表現で理由を問う。そして、この対格の理由を問う表現は、イタリア語等の多くの言語で、whyには見られない特殊な意味を伴うことが多い。以下は、ロシア語とイタリア語の例である。Obenauer (2006) は、これらの構文では、話し手の驚きを伴う否定的な響きを伴うことを観察し、それをSurprise-Disapproval Question (SDQ) と呼んでいる。(ちなみに、Obenauer (2006: 250fn) によれば、英語では、このSDQの解釈は義務的ではない。)

- (13) a. Chto ty smejoshsja? (ロシア語)
 what you laugh
 ‘Why do you laugh?’
- b. Chto ty napisal eto pis'mo?
 what you wrote this letter
 ‘Why do you write this letter?’
- c. Cosa (*non) ridi? (イタリア語)⁴
 what (*not) (you) laugh
 ‘Why do you (*not) laugh?’
- d. Giati/Ti trehi etsi aftos?
 Why/What runs so this

Peter Svenonius (個人談話) は、これらの言語においては、発音されないforを持つとした。そうすることにより、英語のwhat…forと上記のイタリア語やロシア語の事例を統一的に扱うことが可能となる。しかし、この考えには、問題がある。この点を日本語のSDQを見ながら考察しよう。(14a) に見るように、日本語では、whatに相当する「何」とforに相当する「で」を組み合わ

せて理由を問う表現を形成することが可能である。すると、「何で」は、英語のwhat…forに対応すると思われるかもしれないが、そうではない。むしろ、(14b)に見るように、日本語では、「何」と対格の助詞「を」を組み合わせて理由を問う表現が、英語のwhat…forに近いSDQの解釈を持つ。例えば、ロシア語やイタリア語同様に、日本語でも、この「何を」に見る疑問表現は、(14)に例示されるように、SDQの意味を伴う。(Dylan Tsai (個人談話)によれば、中国語でも同じ解釈がなされる。また、ハンガリー語、ドイツ語等に見られる対格を伴うSDQと他の言語のSDQの違いに関しては、Ochi (2004)を参照のこと。)

- (14) a. ポチは何でそんなに吠えているの? (SDQの意味なし)
b. ポチは何をそんなに吠えているの? (SDQの意味あり)
(日本語と中国語の比較に関しては、Fujii, Takita, Yang and Tsai (2013)を参照))

以上の事実は、what…forに対応するのは、「で」を伴う「何で」ではなく、「を」を伴う「何を」であることを強く示唆する。つまり、「何を」は、ReasonPを占めることによりwhat…forに対応するSDQの解釈を得るのである。

では、「何を」がwhat…forに対応する点を、統語的な観点から考察しよう。まず、whyに対応する「何で」とwhat…forに対応する「何を」は、ともに、埋め込み文に生じて主文にスコープを持つことが可能である。⁵

- (15) a. 君は [ポチが なんて そんなに吠えていると] 思うの?
(what-for type)
b. 君は [ポチが 何を そんなに吠えていると] 思うの?
(what-Acc type)⁶

そして、以下に見るように、複文にこれらの理由を問う表現が生じた場合、共に否定の島の制約を受ける。

- (16) a. *君は [ポチが なんて そんなに吠えていると] 思わないの?
(what-for type)
b. *君は [ポチが 何を そんなに吠えていると] 思わないの?
(what-Acc type)

そして、主文では、「何を」だけが否定の島の制約に従う。例えば、以下の理由を問う状況が自然となる文脈を設定しても、「何を」を用いて、(17b) に見るように理由を問うことは出来ない。

- (17) 状況：レミ以外のワンコは吠えていない。そこで、誰かがレミが吠えていない理由を質問する。
a. レミだけ何で吠えていないの?
b. *レミだけ何を吠えていないの?

これは、「何で」が否定よりも高い位置に基底生成されるのに対して、「何を」が否定よりも低い位置に基底生成されることを示している。

以上をまとめると、「何を」が英語のwhat…forのタイプに対応する否定より低い統語位置に基底で生成され、「何で」がwhyのタイプに対応する否定よりも高い位置に基底で生成されることを見た。

以上の点を念頭において、Svenonius の示唆するように、SDQの「何を」が、発音されないforを持つかを、日本語のSDQを見ながら検討しよう。本稿の答えを先取りすると、日本語の「何を」は、発音されないforを持つことはない。その理由は、forに対応する「で」が顕在化された「何をで」という表現は日本語では成立しないからである。つまり、発音されない「で」が存在するのなら、「で」が発音された「何をで」が成立しても良さそうであるが、実際はこの表現は日本語としては不可能である。そこで、日本語では、理由を問う表現が発音されないfor（「で」）を持つのではないと考える。では、「何を」の理由の意味はどこから生じるのであろうか。本稿が採用しているカートグラフィック研究では、要素がある機能範疇の位置を占めることにより、それ独自の意味が付与される点を思い出そう。問題の「何を」は、ReasonPの位置を占める。こ

れにより、「何を」は理由に関わる解釈が付与されるのである。(その詳細は、Endo (2014) を参照のこと。)つまり、「何」やwhatがReasonPに基底で生成されることにより、理由を問う意味が生じる。

- (18) why: Negより高い統語位置に基底生成. (=17a)
what: Negより低い統語位置に基底生成. (=17b)
cf.基底の構造: Why > Neg > what.

以上、理由を問う表現として解釈される「何を」が、ReasonPに生成されることで理由の意味が付与されることを示唆した。

3.2. Reason (2) の特質

本節では、Svenoniusの以下の考えを検討する: 英語のwhat...forと並行的に、英語以外のSDQでも、理由表現のforに相当する発音されない助詞が存在する。

まず、日本語では、(19a-b) に見るように、助詞「で」により原因の意味を表わすことが可能で、その「で」と融合する名詞表現が疑問詞の場合には、理由を問う解釈が可能となる。

- (19) a. 大雪で電車が遅れた。
b. 何で電車が遅れたのですか？

この場合、(19c) に示されるように、「を」を伴うことで理由を問う文は、「で」を伴うと、文として成立しない。もし、すべてのSDQで「何を」に相当する表現がforに相当する発音されない表現を持つならば、このforに相当する表現がどうして発音されると非文法性が生じるか明らかでない。

- (19) c. 何を (*で) 遅れたのですか？

一見、このSDQの「何を」における「を」は内在格 (inherent Case) と思われるかもしれない。内在格は意味内容を持つので、その意味内容が理由である

と考えられるからである。しかし、この可能性はないように思われる。内在格は、通例は削除することが出来ないが、(19c) から分かるように、SDQの「を」は削除することが可能だからである。

(19) c. 何 ϕ 泣いているの？

では、SDQの「何を」は、「もの+を」で代表される対格の位置に基底で生成されるのであろうか。答えは、ノーである。というのも、(19d) に見るように、SDQの「何を」と、「もの+を」で代表される対格の名詞句は、多少座りは悪いが、同一文中に同時に生じることが可能であるからである。そして、この2つの「～を」の表現は、(19d-e) の対比に見るように、入れ替えると据わりが悪く、「ReasonP (SDQ) > 何を (物)」という語順が好まれる。ここから、SDQの「何を」は、「もの+を」が占めるVPの外に生成される基底の構造を持つことがわかる。

(19) d. レミは何をそんなに急いでご飯を食べているのですか？

e. ??レミはご飯をそんなに急いで何を食べているのですか？

以上、本節では、ReasonPに生じるSDQの「何を」が、発音されない「で」を伴うことなく「物+を」に代表される対格の名詞句よりも統語的に高い統語的な位置に基底生成される点を見た。次節では、ReasonPで付与される意味とこのReasonPから文頭への移動先であるIntPで付与される談話の意味を考察する。

4. 理由疑問表現に付与される意味

4.1. ReasonP (2) で付与される意味

本節では、「何を」やwhat...forが基底生成されるReasonP2で付与される意味解釈を考察する。類型論的な観点から見ると、Dylan Tsai (個人談話) や Luigi Rizzi (個人談話) が指摘するように、SDQは、社会的な規範に関わる話し手のムード表現であるdeontic modalを用いて、パラフレーズされることが

多い。例えば、次の日本語の文は、You should not laughというshouldを伴うムード表現を用いてパラフレーズされ、このパラフレーズは、イタリア語や中国語でも成立する。

(20) 君は何をそんなに笑っているの？

Cinque (1999) によれば、IP領域には、一連のムード形式の意味解釈が付与される機能範疇が存在する。ここから、ReasonPも、その一部で、その領域で、deontic modalの意味解釈が付与されると考えられる。

さらに、ReasonP2で付与される意味解釈を見よう。Endo (2014) に見るように、OUPのreviewerによれば、英語のSDQであるwhat…forは、rationalに関わる意味解釈とは適合するが、causeに関わる意味解釈とは適合しない。⁷

(21) A : What is grass green for?

B : a. So that caterpillars can play on it. (Rationale)

b. *Because God created it that way. (Cause)

ちなみに、whyは、次に見るようにRationaleとCauseの2つの解釈が可能である。

(22) A : Why is grass green?

B : a. So that caterpillars can play on it. (Rationale)

b. Because God created it that way. (Cause)

これらの事実は、次のように考えることにより、説明される: (i) whyは、Reason1で基底生成されてcauseの意味解釈を付与される選択肢と(ii) Reason2で基底生成されてrationaleの意味解釈を付与される2つの選択肢を持ち; (iii) what…forはReasonP(2)で基底生成されて、causeの意味解釈を付与される。(ちなみに、日本語におけるcauseとrationaleの区別は、次のように、形態論的に区別されるかもしれないが、その詳細は未解決の問題である: A:なぜ

嫌な仕事をしているの？ B:生きるために (rationale) vs. 親がやれと言うから (cause)。

以上、本節では、ReasonP2で付与される意味解釈は、deontic modalとrationaleが関わることを見た。次節では、ReasonPからの移動の着地点であるIntPの意味解釈を考察する。

4.2. IntP (2) で付与される意味

本節では、ReasonP (2) からの要素の移動先であるIntP (2) の意味解釈を考察する。より具体的には、理由を問うSDQのwhatや「何を」が、whyや「なぜ」とは異なる位置に移動する証拠を考察する。

まず、英語のwhyとwhat…forは、それらが用いられる談話が異なる。例えば、Obenauer (2006) が指摘するように、SDQは、驚きと反対という話し手の意図を伴う談話設定が必要とされる。日本語でも、理由を問う疑問文に用いられる「何を」は、目の前で起っていることに驚きを持って反対する意味で用いられているように思われる。例えば、(23a) の文は、その意味は、「笑うなよ」でパラフレーズされる、相手に対する反対を表明する意味に解釈可能である。そして、その場合には、(23b-c) に見るように、「えっ／ま～」といった驚きの感嘆詞を用いることが可能である。ここでは、話し手が答えを求めているというよりは、話し手の驚きや反対する非難めいた意見が述べられている修辭疑問文に近い響きを感じることができると言える。つまり、この文の話し手はあまり答えを求めている解釈が可能であるようにさえ感じられる。(この驚き、非難の意味の強さは、言語ごとに少し異なるのかもしれない。Tsai Dyan氏によれば、中国語ではSDQの効果は強いようであるが、Obenauerによれば、英語ではSDQの効果はそれほど強くはなく、その効果自体が義務的ではないようである。日本語の場合は、終助詞の「よ」がつくと、この効果は強くなるように感じられる。(中国語の場合は、理由を表わす助詞の削除とOchi (2004) を参照。)

- (23) a. *何を笑っているの (よ) ? (=笑うなよ)
 b. えっ／ま～、何を笑っているの (よ) ?
 c. ?ねえ、私にも教えてよ、何を笑っているの (よ) ?

先に見たように、談話に関わる情報は、CP領域で付与される意味解釈である。そのため、SDQの「何を」が特殊な談話を必要とすることは、その解釈がCPのその解釈専用の階層で付与されることになる。ここでは、その階層を、便宜上Int(2)と呼ぶことにする。

対格のSDQが特殊な談話を必要とすることは、イタリア語でも観察される。Alice Franco (個人談話) によれば、イタリア語でwhyにあたるperchéを用いてされた質問には、Mahという前置き表現を用いることが可能であるが、whatに相当するcosaによりされた質問には、Mahは用いることが出来ない。むしろ、Behが用いられる。これは、2つの理由を問う表現が異なる談話の効果を持つことを示している。先に見たように、本稿で想定されているカートグラフィ研究の考えでは、この2つの異なる談話の意味は、2つの異なるCP領域の位置で付与されることになる。これが、SDQ専用のCP領域として、Int(2)を想定する2つ目の理由である。

- (24) a. A : Perché vieni qui?
 why you.came here
 ‘Why do you come here?’
 B : Mah, …
- b. A : Cosa vieni qui?
 what come here
 ‘Why do you come here?’
 B : ??Mah, … / Beh, …

以上、本節では、ReasonPからの移動先であるIntPで、特別な談話の意味が付与されること見ながら、whyの移動先が通例のwhatの移動先とは異なることを見た。次節では、さらに、how comeとwhy the hellという別の理由を問う表現を見ながら、理由を問う表現には、さらに別の統語的な位置が基底生成される位置があることを見る。

5. さらに別の理由を問う表現How comeとwhy the hell

5.1. How come

Guglielmo Cinque（個人談話）によると、理由を問う疑問形式をカートグラフィアーという階層的な統語構造の点から類型論的に解明するためには、how comeを考慮しなければならない。例えば、how comeは主文にのみ生じるという特殊性を持つ。この点を、Collins（1991）の考えを見ながら考察しよう。Collinsによれば、how comeはCPの主要部の位置に基底生成される。そして、how comeが占めるこの位置は助動詞の占める位置であるため、主語と助動詞の倒置（subject-Aux-inversion: SAI）が生じない。

(25) How come John kissed Mary?

Cf. *How come did John kiss Mary?

さらに、このhow comeはwhyやwhat…for等と異なり、主文にしか生じることがない。（たとえ複文に生じても、埋め込み文の理由を問うことは出来ない。）このhow comeの性質は、Rizzi（1990）のCP基底生成の考えと凍結原理を組み合わせることにより捉えることができる。つまり、how comeは、主文のCPの領域の中でも、IntPの主要部に基底で生成され、その位置でスコープが決定される。（この場合、criterionは、主要部と主要部の関係で満たされると考えなければならない。）その位置でhow comeは、凍結されるので、長距離の移動が不可能となり、主文にのみ生じる。そして、主要部に生じるという性質上、すでにhow comeで埋められている位置に助動詞が移動できないため、how comeの文はSAIの適用を受けない。（これが、Int(1)かInt(2)かは、現在のところ未解決の問題である。）

5.2. Why the hell

さらに、別の理由を問う表現を考察しよう。Ochi（2006）が指摘するように、why the hellという先行する談話が関与しない（non-Discourse-linked: non-D-linked）疑問表現もhow comeと同様に主文にのみ生じる。（これもhow comeと同様に、複文に生じても、埋め込み文の理由を問う解釈は出来ない。）しかし、

why the hellは次に見るようにSAIを許すという点で、how comeと異なる。

(26) Why the hell did you kiss Mary?

これは、why the hellが主文のIntPの指定部の位置を占めることを示唆する。How comeの場合とは異なりIntPの主要部の位置は空いているので、そこをターゲットにして助動詞が移動することが可能となる。その結果、why the hellを持つ文にはSAIが可能となる。

以上の理由を問うwh表現の生じる統語的な位置をまとめると、以下のようになる。

(27) [IntP *why the hell* [Int' *how come*…[ReasonP(1) *why*…Neg [ReasonP(2) *what for*…

次に、これらの表現の占めるCP領域の階層構造を見よう。Ko (2007)によれば、wh表現と他のフォーカス表現には階層関係が見られる。杉崎廉司（個人談話）によれば、理由を問う「何を」とフォーカス表現「だけ」には、次に見るFoc >WHATという階層関係が観察できる。(WHAT=SDQの「何を」)

- (28) a. ジョンだけ何を泣いているの
b. ?何をジョンだけ泣いているの

さらに、「なんで」とフォーカス表現「だけ」には、次に見るFoc >WHATという階層関係が見られる。

- (29) a. ??女んだけなんで泣いているの
b. なんでジョンだけ泣いているの

これら2つのパターンをあわせると、次の階層関係が明らかになる。

(30) Int (1) > Foc > Int (2) ⁸

この階層関係と、why the hellやhow comeの階層関係をまとめると次のようになる。

(31) [IntP (1) *why the hell* [Int' *how come*…]. [FocP…[IntP (2) *what* [ReasonP (1) *why*…Neg [ReasonP (2) (*what*) *for*…

以上、本節では、how comeとwhy the hellを見ながら、それらが、what…forやwhyとは異なる基底の統語的なCPの位置に基底生成されることを見た。

6. まとめと更なる他の理由を問う表現

以上、本稿では、以下の点を見た。

(I) 理由を問う表現の基底位置であるReasonPには、否定より高いタイプと低いタイプの2種類がある。

(31) [ReasonP (high) *なぜ* (CP) > Neg > ReasonP (low) *何を*

(II) ReasonPの移動先にも2つあり、それぞれ異なる談話の意味が付与される。

さらに、how comeやwhy the hellを考察しながら、理由を問う表現には、CPの領域に基底生成される統語的な位置があることを見た。以上をまとめると、理由を問う表現には、以下のような4つの基底の構造が想定されることになる。

(32) [IntP1 *why the hell* [Int' *how come*…]. [FocP…[IntP (2) *what* [ReasonP1 *why*…Neg [ReasonP (2) (*what*) *for*…

未解決の問題としては、how comeとwhy the hellに代表されるCPの領域で基底生成される意味が何であるのかを特定するという作業がある。

さらに、別の理由を問う表現として、イタリア語に見る疑問形式がある。

Juliana Giusti (個人談話) によると、イタリア語では、whatがto doに相当する表現cosa…fareを伴うと理由を問う意味となる。渡辺明氏 (個人談話) の指摘によれば、日本語でも、whatとdoを組み合わせて理由を問う形式として「何」と「しに」をあわせた、「何しに」がある：「何しにに來たの」。しかし、「何しに」は、非対格の動詞と生じるのが自然であるが、イタリア語ではこのような制約はない。日本語で、イタリア語のwhat…to doに対応する理由を問う表現は、むしろ東北方言の「何して」(=「なして」と発音)の方が近いのかもしれない。というのも、「なして」は、どのようなタイプの動詞にでも用いることが可能であるからである。この東北方言の「なして」は、東京方言では、「どうして」に相当する疑問文のように、感じられるが、その詳細は未解決の問題である。

9

注

* 本稿は、Endo (2014)、2013年7月にジュネーブ大学で開催されたInternational Congress of Linguists 19および2013年3月南山大学における招待発表の一部に加筆修正を施したものである。以下の方々からは有益なコメントをいただいた。感謝の意を表したい (敬称略) : Byron Ahn, Carlo Cecchetto, Guglielmo Cinque, Juliana Giusti, Liliane Haegeman, Hilda Koopman, 中村浩一郎, Rachel Nye, 越智 正男, Cecilia Poletto, Luigi Rizzi, 齋藤 衛, Ur Shlonsky, Gabriela Soare, Margaret Speas, Michal Starke, 杉崎 廉司, Peter Svenonius, 高野祐二, 渡辺明。

- 1) この点については、Merchant (2002, fn. 13) も参考のこと。この点については、Rachel Nye (私信) との議論が有益であった。
- 2) より具体的には、Intの付与する意味は、PPではなくDPで具現されるという中核構造具現 (Canonical Structural Realization: CSR) の特徴を持つと考えられる (CSRについては、Grimshaw 1981 Chomsky 1986を参照のこと)。
- 3) whatはforと隣接して発音されることが不可能という訳ではない。例えば、Rachel Nye (私信) が指摘するように、what-forの連鎖は、次に見るように、swipingの適用を受けた場合、隣接することが可能である。ここで、(i)の文は、(ii)の基底構造から派生されている。

(i) A : He's going to Zurich.

B : What for?

(ii) He's going to Zurich but I don't know what for.

- 4) SDQは、Liliane Haegeman (私信)によれば、West Flemishにも観察される。
- 5) Ochi (2006) が指摘するように、他の言語では、SDQのwhatはその生起が主文に限られるという制限がある。これらの言語では、主文にwhatが基底規定生成されるため、そこで凍結するのもかもしれない。詳しくは、Endo (2014) を参照のこと。
- 6) Kurafuji (1996) は、(i) のような例を基に、SDQが非対格動詞に限られるとしているが、以下に見るように、文体を整えれば、SDQは非能格動詞で用いることも可能である。Luigi Rizzi (私信)によれば、中核的には、イタリア語のSDQは、非能格であるらしい。この点の更なる研究が必要である。

(i) *君は何をアメリカに來ているの

(ii) 君は何をわざわざアメリカなんかに來ているの

ちなみに、大塚愛子 (個人談話)によると、日本語手話でも、(i)に対応する表現は文法的となる。

- 7) 日本語の理由を問う表現である「なんで」は、「何」+「で」から構成される。ここで、「で」は、「雪で電車が遅れた」に見るように、理由を表わす助詞であるので、「何」+「で」は、英語のwhat…forに対応するよう見えるかもしれない。しかし、「なんで」は、すでに見たように否定の島の制約を受けない。これは、「なんで」が、否定要素よりも上の階層にあることを意味している。つまり、「なんで」は英語のwhyと同様に否定要素よりも上の階層に生じる。これは、「何」と「で」が語彙化されて一語になっているのに対して、英語のwhatとforは語彙化されて一語にはなっていないことを示唆する。言語類型論的な観点から見ると、これはフランス語の理由を問う表現であるpourquoi 'why'と同じパターンである。つまり、pourquoiは、pour 'for'とquoi 'what'から構成されるが、それら2つの要素は語彙化されているため、一語となる。そして、pourquoiも否定の島には従わない。似た状況は、イタリア語の理由を問う表現であるperchéにも見られる。ここで、perはforに対応する。chéは、イタリア語の場合、英語の補文標識thatとも似た用法を持つ点で少し異なるのだが、whatを意味することが可能という点で似た性質をもる。ここでも、perchéは、一語として振る舞うため、語彙化されており、否定の島の制約を受けない。
- 8) 中村浩一郎 (個人談話) が指摘するように、同じフォーカス表現でも、この「しか」といったフォーカス表現に見られる階層は、「も」等のフォーカス表現には見られない。こ

れは、フォーカス表現が、統一した要素ではなくさらに分化した階層を持つことを示唆する。その階層については、今後の研究課題である。

- 9) また、理由を問う表現ではないが、英語には、what…likeというwhat…forとは異なる分裂形式を用いた表現により、howに似た意味を表すことがある。これに対応する日本語としては、「如何に」がある。ここで、「如何に」の「如」は老子の「上善水の如し」という表現に見るように「ごとく」を意味する点で、英語のlikeに相当する。一方、「何」はwhatに相当する。そして、これらが複合した形式が英語のwhat…likeという分裂形式に対応している。

参考文献

- Chomsky, Noam. 1986. *Knowledge of language*. New York : Praeger.
- Cinque, Guglielmo. 1999. *Adverbs and functional heads: A cross-linguistic perspective*. Oxford; Oxford University Press.
- Endo, Yoshio. 2006. *A study of the cartography of Japanese syntactic structures*. Ph.D. dissertation. University of Geneva, Switzerland.
- Endo, Yoshio. 2007. *Locality and information structure*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Endo, Yoshio. 2011. A cartographic approach to head movement: A case study of adverbial clauses. To appear in B. Suranyi ed. *Domains at the interfaces of narrow syntax*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Endo Yoshio. 2012 a. The syntax-discourse interface in adverbial clauses. In L. Aelbrecht, L. Haegeman and R. Nye eds. *Main clause phenomena: State of the art*. pp. 365-384. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Endo, Yoshio. 2012 b. Illocutionary force and discourse particle in the syntax of Japanese. In W. Abraham & E. Leiss eds. *Modality and theory of mind elements across languages*. pp. 405-425. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Endo, Yoshio 2014. Two ReasonPs. To appear in *Beyond functional sequences* ed. by Ur Shlonsky Oxford: Oxford University Press.
- 遠藤喜雄. 2014. 『日本語カートグラフィー研究序説』東京：ひつじ書房.
- Grimshaw, Jane. 1981. Form, function, and language acquisition device. In Carl Baker and

- John McCarthy eds. *The logical problem of language acquisition*, 165-182. Cambridge, MA: MIT Press.
- Ko, Heejeong. 2007. Asymmetries in scrambling and cyclic linearization, *Linguistic Inquiry* 38: 49-83.
- Kurafuji, Takeo. 1996. Unambiguous checking. *MIT Working Papers in Linguistics* 26: 81-96. Cambridge, Mass.: MITWPL.
- Merchant, Jason. 2002. Swiping in Germanic. In C. Jan-Wouter Zwart and Werner Abraham eds. *Studies in Comparative Germanic Syntax*. pp.295-321. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Obenauer, Hans. 2006. Special interrogatives. In Jenny Doetjes and Paz Gonzalez (eds.) *Romance language and linguistic theory 2004*. pp.153-202. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Ochi, Masao. 2004. *How come* and other adjunct *wh*-phrases: A cross-linguistic Perspective. *Language and Linguistics* 5.1, 29-57.
- Tomohiro Fujii, Kensuke Takita, Barry Chung-Yu Yang and Wei-Tien Dylan Tsai. 2013. Comparative remarks on *wh*-adverbials in-situ in Japanese and Chinese. MS. Yokohama National University, Mie University, National United University, National Tsing Hua University.
- Rizzi, Luigi. 2006. On the the form of chains: Criterial positions and ECP effects. In Lisa Lai-Shen Cheng and Norbert Corver eds. *Wh movement: Moving on*. 97-133. Cambridge, MA: MIT Press.
- Rizzi, Luigi. 2004. Locality and left periphery. In Adriana Belletti ed. *Structure and beyond*. 223-251. Oxford: Oxford University Press.
- Rizzi, Luigi. 2013. The cartography of syntactic structures: Locality and freezing effects on movement, To appear in Cardinaletti Anna, Guglielmo Cinque and Yoshio Endo eds. *On Peripheries*. Tokyo: Hituzi Publishing Company.
- Shlonsky, Ur and Gabriela Soare. 2011. Where's 'why'? *Linguistic Inquiry* 42, 651-669.